に「高良川における治水対策の促進に関する要望書」を提出し、ポンプの増強及び浚渫、遊水池の設置等を要望している。

昨年度は、「大町東部地区流域治水に係る実務者会議」を開催し、意見交換、現地確認を行った。

今年4月には、国交省河川事務所からも現地視察をしていただき、今後、実務者会議でも、助言いただけると思っている。

③　今年度は、高良川下流域の浚渫を計画されている。その他排水ポンプ等については、具体的な言及はないため、現時点では、お答えできない。

豪雨時における六角川河口堰の運用に関する協議について

早田　康成

議員　これまで、排水ポンプの増設、障害物排除の葦よけプールなど、災害対策として改善策がとられてきたことは、住民の不安を和らげることになったかも知れない。しかし、大きな問題は有明海からの潮の満ち引きにある。満潮時の六角川は逆流現象が生じる。豪雨と満潮時が重なった場合、六角川の許容量は限界に対し、排水ポンプ運転調整、排水停止、そして内水氾濫である。

そのため、災害防止策として六角川河口堰の活用ができれば、内水氾濫を少しだけでも軽減させることができると考える。

この質問内容については、以前取り上げたところである。その際「令和元年の豪雨時の干潮時に河口堰を締め切っていたとしても、1、2時間程度で海より、川の水位が高くなる。」との回答をいただいたが、ここに1、2時間のため池効果があるとするならば、少しでも被害を食い止めるために堰を操作すべきではないかと考える。

▲六角川と牛津川が合流する河口堰

要は、地区の水害を防ぐためには、有明海の干満の自然現象を見極め、六角川河口堰を効率よく運用し、有明海からの潮の逆流を止めることにある。六角川のこれら問題に対し、各行政機関及び関係機関と協議していく問題と捉えるが如何なりや。

河口堰の運用については建設当時から関係機関との話し合いがいろいろとなされてきた経緯は十分承知している。しかし、建設当時の環境とは違った昨今の異常気象現象を鑑みれば、六角川河口堰を主とした災害対策を検討していくことが必須ではないかと考える。隣接市町と連携して取り組み協議し、また、国、県関係者、学識経験者並びに有明海沿岸の関係機関との話し合い等、交渉していくべき機会を作ることが重要と思うが考えを伺う。

農林建設課長　六角川河口堰は高潮対策を目的として台風接近時など、潮位が上がる場合に、一時的に閉門する運用が行われている。

ご指摘の「豪雨時における六角川河口堰の活用の有効性」については、すでに、検討、協議が行われている。

干潮、満潮は約6時間おきに繰り返されるので、干潮時に河口堰を締め切ったとしても大体72分で、満杯になり、有明海よりも六角川の水位が高くなる。このため、次の引き潮開始前まで洪水を貯留することは出来ず、ゲートを開放する必要がある。

したがって、当該操作による浸水被害軽減の効果は見込めないと、国、県、近隣市町、関係機関の共通認識になっている。

過去、国や県、気象台等を含めた近隣3市3町で構成する「六角川水系流域治水協議会」においても、議題とされた経緯があるが、六角川河口堰の活用については、課題が多く、現実的でないことを確認している。

上流側の水が河口堰が閉まっていることで逃げ場がなくなった場合、両岸堤防からの越水が発生する可能性があり、その場合の被害は非常に大きいものであると想定される。

また、六角川で水が溜まったままの場合、堤防や川底から浸透し、堤防外側へ滲みだし、農作物や排水への影響も懸念されている。

したがって、大雨時の河口堰の治水対策としての活用は現時点では難しいと考えるが、浸水被害軽減に向けて、国・県、流域市町と連携して取り組んでいく。

町政へのAI導入についての是非を問う

江口　正勝

議員　大町町でも、先の議会で町長自らがAIの利活用を表明されたが、その背景と目論見を伺う。

①　町のAIに対する認識と導入の目的は何か。

②　具体的には、どのような分野でどのような役割を期待しているのか。

③　AI導入で、コンサルの必要性の低減や事務職の「失業」という問題は発生しないのか。

④　情報の流出やデータの消失という懸念は無いのか。紙